

集落の様相にみる古墳築造の条件

——空間的視点からの方法論的予察——

倉 林 眞 砂 斗

(一)

考古学という学問が絶えざる資料の増加を宿命づけられている以上、我々の認識や解釈もまた絶えず新たな展開を見せていくことになる。しかし得られる情報は質・量共に不均衡であることが多く、研究者はこの多様で不均衡な情報を、意識的に総合してより具体的な様相を把握していかざるをえない。更に諸情報を総合した結果生まれた具体像を念頭に置いて、再び不均衡で多様な個々の情報に戻り、時間及び空間的差違を認識しながら歴史的意義を追及していく必要がある。その過程において様々な形で新しい問題意識が生じることになる。このような問題意識の中には、他分野の学問の研究手法や成果を援用して資料に取り組むことで考察を進めることができる場合がある。実際近年の資料の多様化に伴って学際的研究は活発に行なわれ、目覚ましい効果をあげている。一方これとは全く異なる次元での問題意識も生じてくる。その一つに考古資料の空間的把握という問題がある。空間的に離れて確認される考古資料の関係を復元する作業には、調査によって得られた資料そのものに対する考察を進める場合とは全く異なる次元での解釈が必要とされる。これは調査方法が精緻になろうと、調査対象面積がどれ程拡大されようと避けられない問題である。考古資料の空間的把握には複数のレベルが存在し、どのレベルに視点を据えるか、あるいは併用するかは目的意識によって異なる¹⁾。その際考古資料のみでなく、資料を取りまく諸状況にまで考察の対象を広げることは、資料の多様性の中に一定の傾向を見出し、歴史的解釈を行なう際の一助になると考える。

以上のような問題意識に基づき弥生時代から古墳時代前期にかけて営まれた遺跡を対象として、居住域・墓域²⁾の様相及びこれらを取りまく地理的環境の相互関係に対する認識の重要性を指摘し、前方後円墳を代表とする古墳が築造される条件を古墳以外から探るための一視点を提示するのを本稿の目的とする。つまり遺跡内の様相を踏まえながら、遺跡間の関係を探る方法を模索していくわけである。関東地方では近年の大規模調査の増加を反映して、居住域と方形周溝墓を中心として形成された墓域との空間的把握を可能にする例が多く見られる³⁾。弥生時代からの居住域と墓域の関係を把握していくことは、集落と隔絶した様相を指摘されることの多い前期古墳が、如何なる状況の中で築造されたかを考える視点の一つを提供する。また遺跡周辺の地理的環境は、集落を形成し

た集団の生産活動をはじめとする様々な行動の主要舞台であるため、特に注意すべき考察対象であると考えられる。

(二)

まず最初に遺跡内の様相として、居住域と墓域の位置関係及び前者から後者への転換現象を指摘しておく。両者の関係のある程度把握できる遺跡を対象としているが、認識できる様相からこれらの遺跡は次のように分類できる。

(1) 居住域と墓域が重複しない遺跡

- a 環濠をもつ遺跡～大塚・歳勝土遺跡，殿屋敷遺跡群B地区・C地区，中里前原遺跡群⁴⁾，大崎台遺跡B地区・C地区（弥生時代中期段階）
- b 環濠をもたない遺跡～新作小高台遺跡，船田遺跡，石川天野遺跡，駒堀遺跡，大崎台遺跡B地区（古墳時代前期段階⁵⁾，日高遺跡，峯岸山遺跡，荒砥島原遺跡，荒砥二之堰遺跡

(2) 居住域が墓域に転換した様相を把握できる遺跡⁶⁾

折本西原遺跡，山王山遺跡，新羽大竹遺跡，そうごう遺跡，宇津木向原遺跡，神谷原遺跡，下山遺跡，薬師耕地前遺跡，番清水遺跡，権現山遺跡，南総中学遺跡⁷⁾，権現後遺跡，田川遺跡群第1・2地点，草刈遺跡A区，飯合作遺跡，御正作遺跡，下郷遺跡，倉賀野万福寺遺跡⁸⁾，伊勢崎・東流通団地遺跡

環濠をもつ集落では、居住開始当初から居住域と墓域は一定の距離を保ち、かつ両者がそれぞれの機能を果たすのに必要な面積を保有するという計画性をうかがうことができる。両者は環濠によって明確に区分され、住居址の重複や近接した状況が多く見られること、また方形周溝墓が辺を揃えて連続的に展開していることから、各々の空間のもつ機能が一定期間維持されたことが分かる。このような様相は弥生時代中期の環濠集落遺跡において最も顕著であると言える。これに対し(1)―bとして分類された各遺跡は環濠集落遺跡にみられた空間関係を示すものの、検出される住居址の総数や重複・近接状況からみて、より小規模で短期間の集落経営をうかがわせる。集落の形成から廃絶までの過程が絶えず同じ原理に基づくとは限らないが、このような集落形態が弥生時代後期から古墳時代前期を通じて見られることは注意しなければならない。一方居住域が墓域に転換する例も多い。広域調査により集落の大部分が明らかにされている遺跡では、この転換現象を地形と関連づけて明確に認めることができ、前項のb群として括れる集落の在り方が重複している結果であると解することができる。調査面積が限られる場合でも、遺構の検出状況や周辺地形からみて未調査区にも該期の遺構群が存在することを推測でき、集落として機能した空間の一部の状況を知りうる。現在我々が認識する墓域は段階を経て形成されたものであり、墓の築造開始が直ちに居住地の移転に結びつくとは限らないが、必然的結果としての墓域の拡大は空間的にもまた理念的にも居住地としての機能を喪失させるため、近辺における新たな居住地の形成と対応関係にあると考えられる。

集落の様相にみる古墳築造の条件

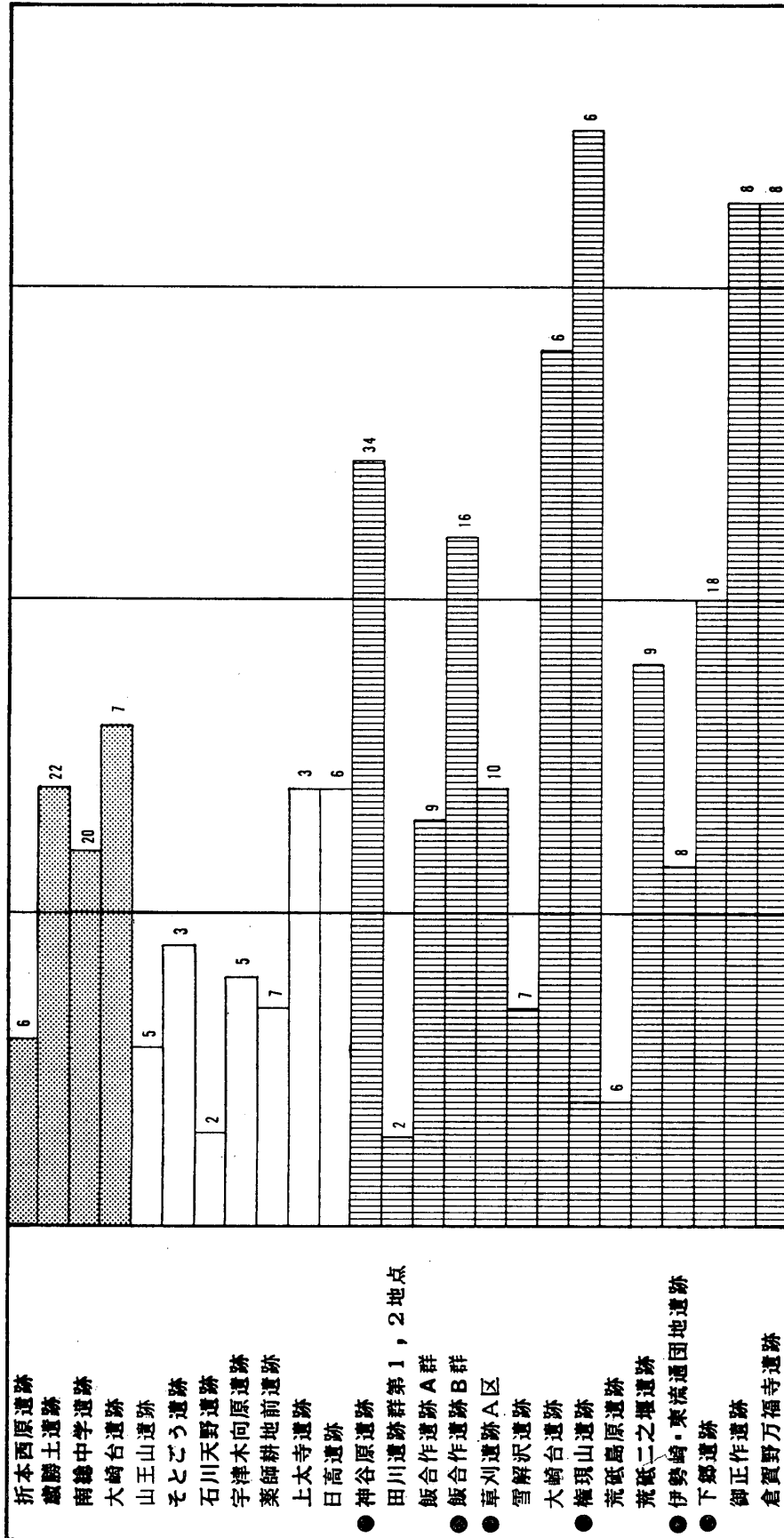
広域調査により墓址群と一定の距離を保って住居址群が検出される例は言うまでもなく、墓域のみが確認される場合も居住地として利用できる空間が隣接して存在し、墓域が居住域に近接し密接な関係にあるという認識を支持する。

この認識は居住域と墓域に重複関係がみられない遺跡においても有効である。また伴出する土器の型式に断絶を認め得ない場合、かつて居住していた集団が居住地を移動させた後、あるいは移動させつつ墓域として利用しだしたという解釈に矛盾しない。また後にみる周辺の地形と密接に関連することであるが、仮に集落の入り口とでも言うべきものを理念的に想定した場合、特別な理由がない限り省力的なルートをとると考えられ、遺跡立地に目を転じると集落外から集落内への動きの方向を見て取ることができる。このような視点から居住域と墓域の在り方をみると、沖積地に対して両者が並ぶ場合⁹⁾と、後者が前者の奥部に位置する場合¹⁰⁾がある。特に奥部に位置するような在り方は、日常の生活空間と理念の支配する空間とを明確に峻別する姿勢が保持されると共に、後者は前者に固有のものであるという意識が働いた結果であると考えられる。

生産基盤の近くに居住する蓋然性が高い以上、依存する生産基盤の遷地や拡大、人口増加による居住地の拡大、あるいはその他の生活環境の変化による空間利用の改変の一貫としてこのような転換現象を解することが可能である。また転換にイデオロギー的な意味が存在したかもしれない。

いずれにせよ転換が居住域から墓域へという一方向的であることが多いことから、墓域形成は居住域の展開に対して従属的であり、集落の生成から廃絶までの過程の一断面としてこのような現象が認識できるのである。方形周溝墓を中心とする墓域は本来的な機能からしても基本的には居住域の展開に対応して形成されるものであり、この居住域と墓域で一集落として完結しているとみることができるといえる。

一集落の認識に支えられて築造される方形周溝墓の基本的性格は維持されつつ、古墳を築造する社会の下部構造としての性格を示す様々な不均等性が顕在化してくるようになる。この不均等性は、方形周溝墓そのものの規模・形態そして周溝内出土土器の器種や量において顕著である。方形周溝墓の連続的展開と密接に関わる要素として、方形であることと規模が同程度であることがあげられる。中には長方形や台形を呈する例もみられるが各辺を等しくしようとする意識が働いていたと考えられ、規模に関しては弥生時代中期段階で既に較差が認められる。例えば折本西原遺跡では3号方形周溝墓(23.3×22.66m)、大崎台遺跡B地区では7号方形周溝墓(22.8×21.85m)、C地区では9号方形周溝墓(20.7×21.5m)のような20mを越す大形の方形周溝墓が検出されている。しかし群在する場合大小の差は見られるものの、傑出した規模のものを含まないことが多い。例えば歳勝土遺跡では最大がS3で14.9×14.5m、最小がS18で2.35×5.65m、大崎台遺跡B地区北東部に群在する方形周溝墓群では最大が一辺16.7m、最小が11mである。後期でもこの傾向は認められる。例えば薬師耕地前遺跡では最大が11.2×11.3m、最小が6.2×6.4m、日高遺跡では最大が15×17m、最小が5.8×7.5mである。最大値・最小値は遺跡によって異なるが、規模較差の傾向は両期においては類似する(図1)¹¹⁾。しかし古墳時代前期になると較差は急激に広がる傾向を見せる。例えば神



= 弥生時代中期
 = 弥生時代後期
 = 古墳時代前期

図1 墓域にみられる規模較差の変遷

集落の様相にみる古墳築造の条件

谷原遺跡では最大約22×20m，最小3.7×4.5m，御正作遺跡では最大28×29.6m，最小6.2×5.7mである。弥生時代中期・後期にみられた規模較差の最大値の1.5から2倍以上に及ぶ較差が古墳時代前期に見られるようになる。この較差拡大現象は，群在して築造された周溝墓の数の差として捉えることはできない。すなわち図1からは築造数の多少が較差拡大に何らかの影響を及ぼしているとは考え難い。群在しながら著しい規模較差が認められる遺跡が出現する一方，田川遺跡群第1・2地点，雪解沢遺跡，荒砥島原遺跡のように規模較差が小さい方形周溝墓群により墓域が形成されている遺跡も存在することに注意する必要がある。

形態に関しても変遷がうかがえる。弥生時代中期の方形周溝墓は，周溝の四隅が切れる形態がほ

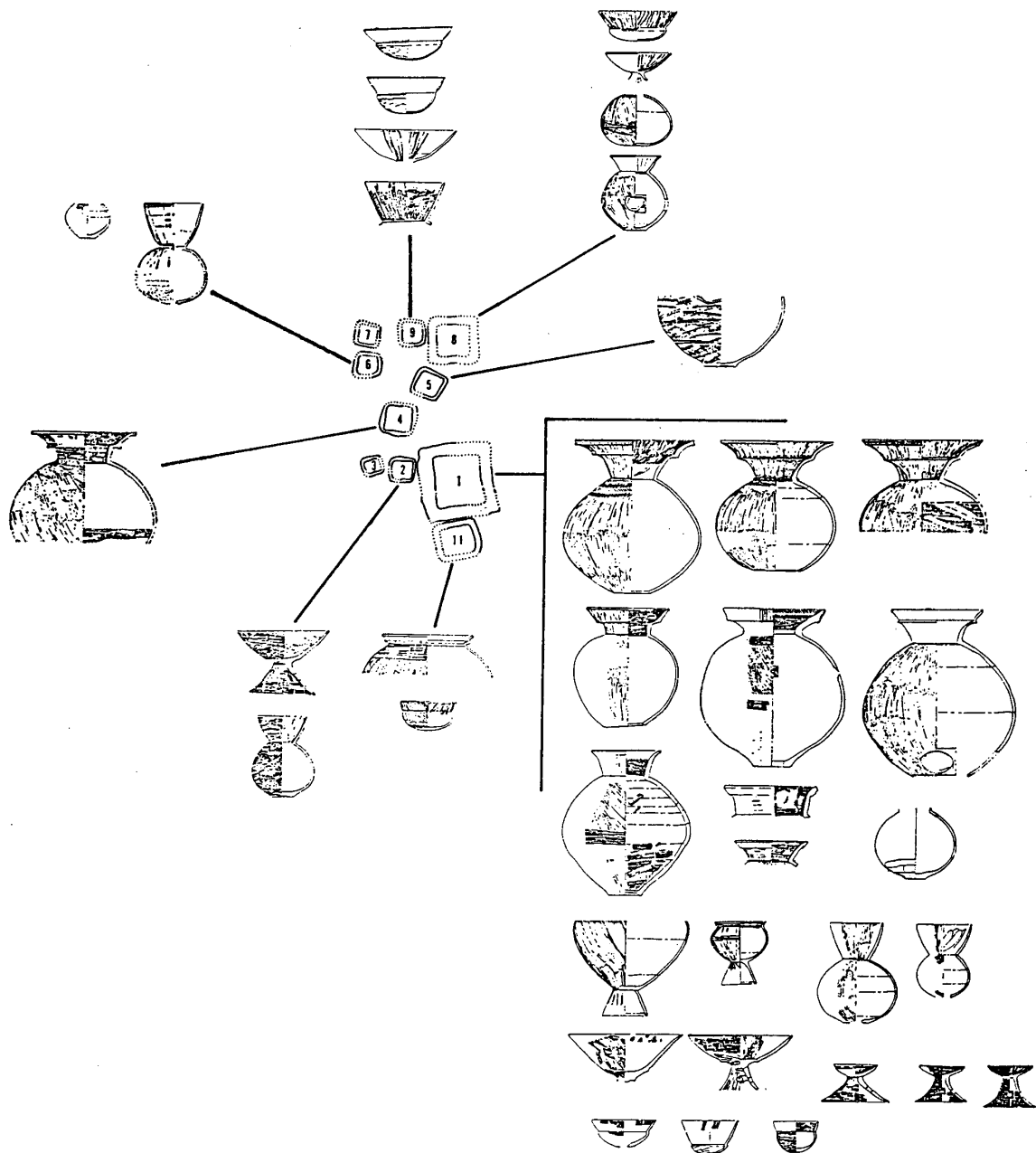


図2 倉賀野万福寺遺跡における出土土器の偏在状況

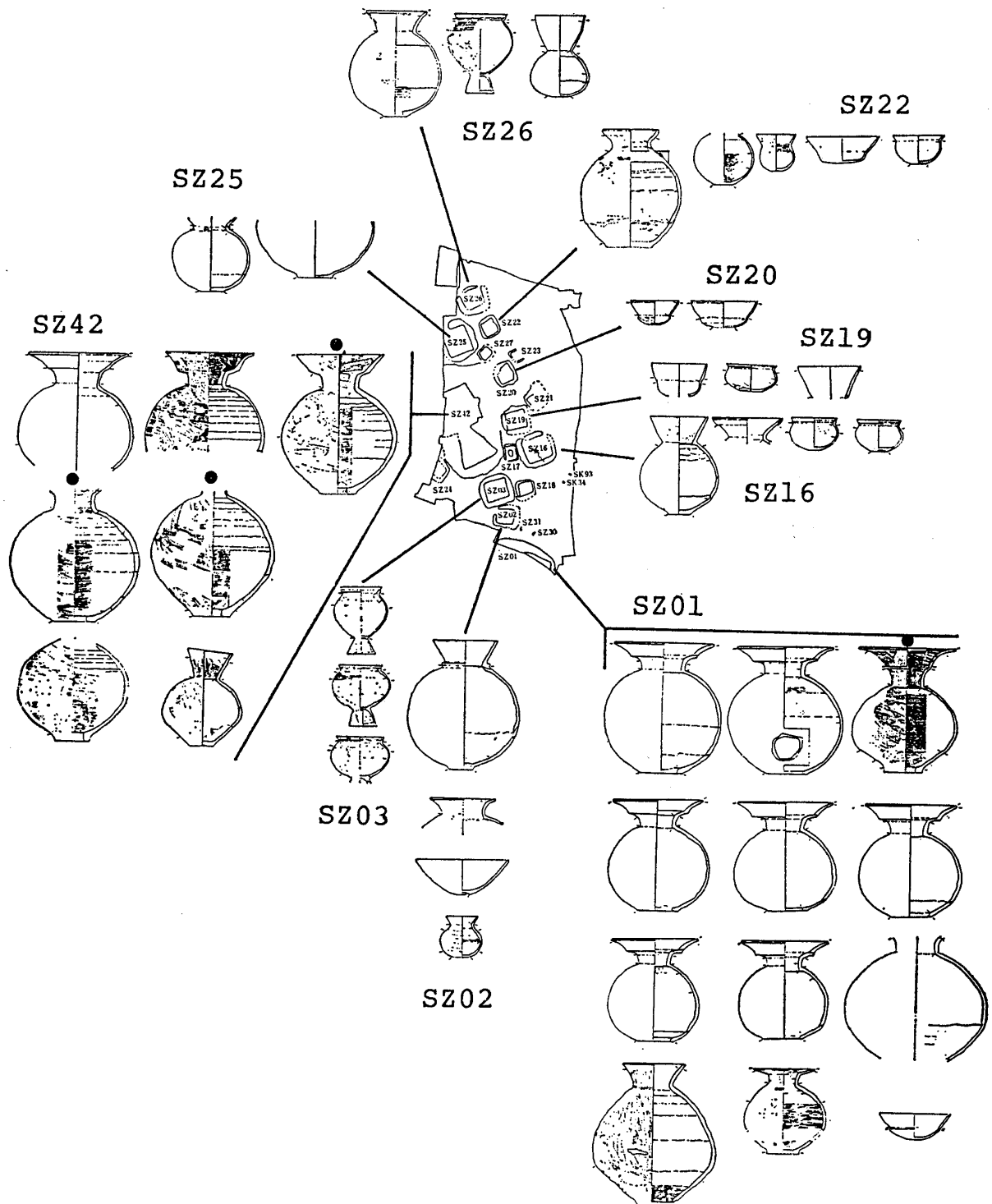


図3 下郷遺跡における出土土器の偏在状況(1)

集落の様相にみる古墳築造の条件

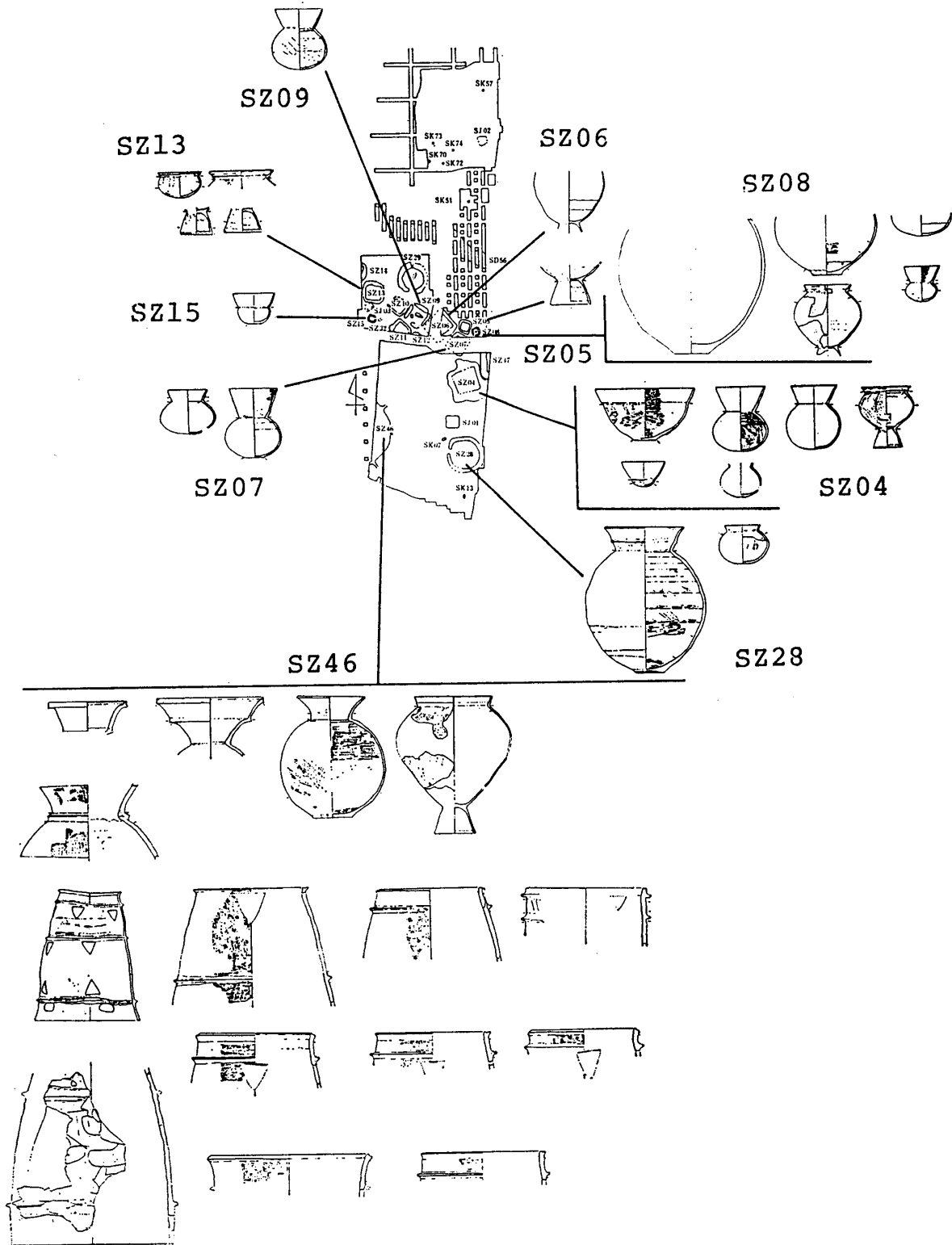


図4 下郷遺跡における出土土器の偏在状況(2)

とんどである。後期になると隅を掘り残さない形態が出現する一方、一から三ヶ所の隅を掘り残す形態もみられる。同一の墓群中に異なる周溝形態を持つものが混在することがあり、遺構の残存状況における差異でない場合、周溝形態の差に如何なる意味があるのかは不明である。古墳時代前期では大崎台遺跡、番清水遺跡、田川遺跡群第1・2地点のように一隅を掘り残す形態も存在するが、大部分は隅を掘り残さない形態である。また一辺の中央を陸橋上に掘り残す例（例えば神谷原遺跡、権現山遺跡¹²⁾）や前方後方形を呈する例（例えば飯合作遺跡、下郷遺跡、伊勢崎・東流通団地遺跡）が方形周溝群の中に出現する。これらの形態の周溝墓は群中で最大規模であることが多く、権現山遺跡2号方形周溝墓が全長約30m、飯合作遺跡1・2号墳が全長約37m（周溝を含む）、下郷遺跡SZ42が全長約42m、伊勢崎・東流通団地遺跡1—19—8周溝墓が全長約37m（周溝を含む）である。このように形態は時間をおって変化しつつ、古墳時代前期に顕著となる規模較差拡大に対応して新たな展開を見せる。

一方周溝内で土器が底部穿孔、破碎された状態で出土することが多い。これらの土器のほとんどは溝底より数cmから数十cm浮いた状況で検出される。このような出土状況に対しては、墳丘及び墳丘上の様相が明確でない例が大部分であるため様々な解釈が可能である¹³⁾。我々が認識する出土状況に至った過程を問わずに、一墓域内において周溝内から出土した土器の量や器種を比較すると、規模・形態に対応するかのような差が認められる場合がある。例えば倉賀野万福寺遺跡では、周溝を含めると一辺が30mを超える1号方形周溝墓からは二重口縁壺形土器・台付甕形土器・埴・高坏・器台などが出土しており、量や器種の多さでも他の周溝墓を圧倒している(図2)¹⁴⁾。また下郷遺跡では同形態の方形周溝墓間に量・器種で差が認められるものの、規模の差と必ずしも明確に対応せず、むしろ規模に加えて形態の差が出土土器の様相の違いに極めて顕著に対応している¹⁵⁾(図3・4)。SZ42やこれと同様前方後方形を呈すると考えられるSZ01からは焼成前及び焼成後に底部穿孔された二重口縁壺形土器が多く出土している。また前方後円墳の一部であるSZ46にだけ多量の埴輪が伴う¹⁶⁾。このような周溝内出土土器の器種における偏在状況は、先に述べた規模較差拡大現象や異なる形態の出現と対応して、一墓域内における被葬者間に階層化が生じた、あるいは進化したという社会状況を顕著に示している。

次に以上見てきたような集落内の様相、すなわち一貫した居住域と墓域の一体性及び墓域内で次第に顕著になる諸要素における較差が、集落外の要因と如何に関わるのかという問題が提起される。時間的変遷の中で較差が必ずしも一律に捉えられないことからこのような視点が必要である。本稿では最も認識し易く、かつ外的要因を規定したと考えられる重要な要素として、遺跡周辺の地理的環境を取り上げることとする。

(三)

遺跡の周辺に注目する場合、遺跡内での変遷や多様性をとりあえず捨象して遺跡全体をドットとして捉えることにより、集落の形成に関わった外的条件としての地理的環境を巨視的に把握するこ

とができる。細かく見ていくと周辺の地形は実に多様であるが、特に次の二要素に絞って各遺跡を類別していくことにする。まず遺跡立地面と沖積地との比高差は(Ⅰ)：5m以内、(Ⅱ)：10m前後、(Ⅲ)：20～30m、(Ⅳ)：40m前後と分類することができる(図5)¹⁷⁾。(Ⅰ)群には弥生時代中期の遺跡は含まれず、古墳時代前期の遺跡が多い。群馬県の遺跡は峯岸山遺跡以外総てこの群に含まれる。(Ⅱ)群にも弥生時代中期の遺跡は含まれず、終末期や古墳時代前期に属する遺跡が多い。各時期の、あるいは各時期にまたがる遺跡は(Ⅲ)群に多く含まれるが、群馬県の遺跡はこれに属さない。(Ⅳ)群も各時期の遺跡を含むが、全体における割合は小さい。時期別に見ると、弥生時代中期段階の遺跡は総て(Ⅲ)・(Ⅳ)群に含まれる。後期になると各群に含まれるようになるが、この傾向は古墳時代前期になると更に強まり、群馬県を中心に(Ⅰ)群の遺跡の増加が目立つ。比高差は周辺の地形と密接に関わるので、次に遺跡を取りまく地形についてみていくことにする。

各遺跡の立地を平面的に捉えた場合、周辺における丘陵・台地・微高地・沖積地・河川などの在り方から大きく次の三群に分類できる。(A)：幅は約200～2,000mと様々であるが、両側を標高が近似する丘陵や台地に挟まれ中小河川が流れる沖積地、あるいはそこから入り込む支谷を臨む所に立地する。(B)：大河川によって形成された広い沖積地や海岸平野を臨む台地、丘陵上に立地する。(C)：周辺にほとんど比高差をもたずに現在の水田面が広がる、低台地・河岸段丘・自然堤防・扇状地などの微高地上に立地する。各群に含まれる遺跡は次の通りである。

(A)群 大塚・歳勝土遺跡、折本西原遺跡、山王山遺跡、新羽大竹遺跡、そとごう遺跡、殿屋敷遺跡群、受地だいやま遺跡、船田遺跡、石川天野遺跡、宇津木向原遺跡、神谷原遺跡、大崎台遺跡、南総中学遺跡、雪解沢遺跡、権現後遺跡、田川遺跡群第1・2地点、飯合作遺跡、峯岸山遺跡

(B)群 新作小高台遺跡、中里前原遺跡群¹⁸⁾、駒堀遺跡、薬師耕地前遺跡、番清水遺跡、権現山遺跡、草刈遺跡

(C)群 日高遺跡、荒砥島原遺跡、荒砥二之堰遺跡、御正作遺跡、下郷遺跡、倉賀野万福寺遺跡、伊勢崎・東流通団地遺跡

各群の具体例をいくつか見ていくことにする¹⁹⁾。大塚・歳勝土遺跡は東流して鶴見川に合流する早淵川が形成する幅約300m、標高約10から11mの沖積地を臨んで立地する(図6—1)。折本西原遺跡は東流する鶴見川と大熊川に挟まれた、東西に長い台地の中ほどに位置する。西方は丘陵へと移行するが、遺跡周辺には平坦面が広がっている。新羽大竹遺跡は大熊川と鶴見川の合流地点を臨み、南に突出する細長い丘陵上に立地する。山王山遺跡も鶴見川が東流する沖積地を臨み、周辺は樹枝状に支谷が入り込む複雑な地形を呈している。傾斜地に遺跡が形成されているため、遺跡内の比高差が大きく遺構の遺存状況は良好とは言えない。南総中学遺跡は北側を西流する内田川と、南側から西側を北流する養老川に挟まれた舌状台地上に立地し、富士台丘陵の北西端部にあたる。基部に東と西から小支谷が入り込んでいるため、独立しているかのような地形を呈している(図6—2)。南に約300mのところ的雪解沢遺跡がある。これら6遺跡は全て中小河川が形成する細長

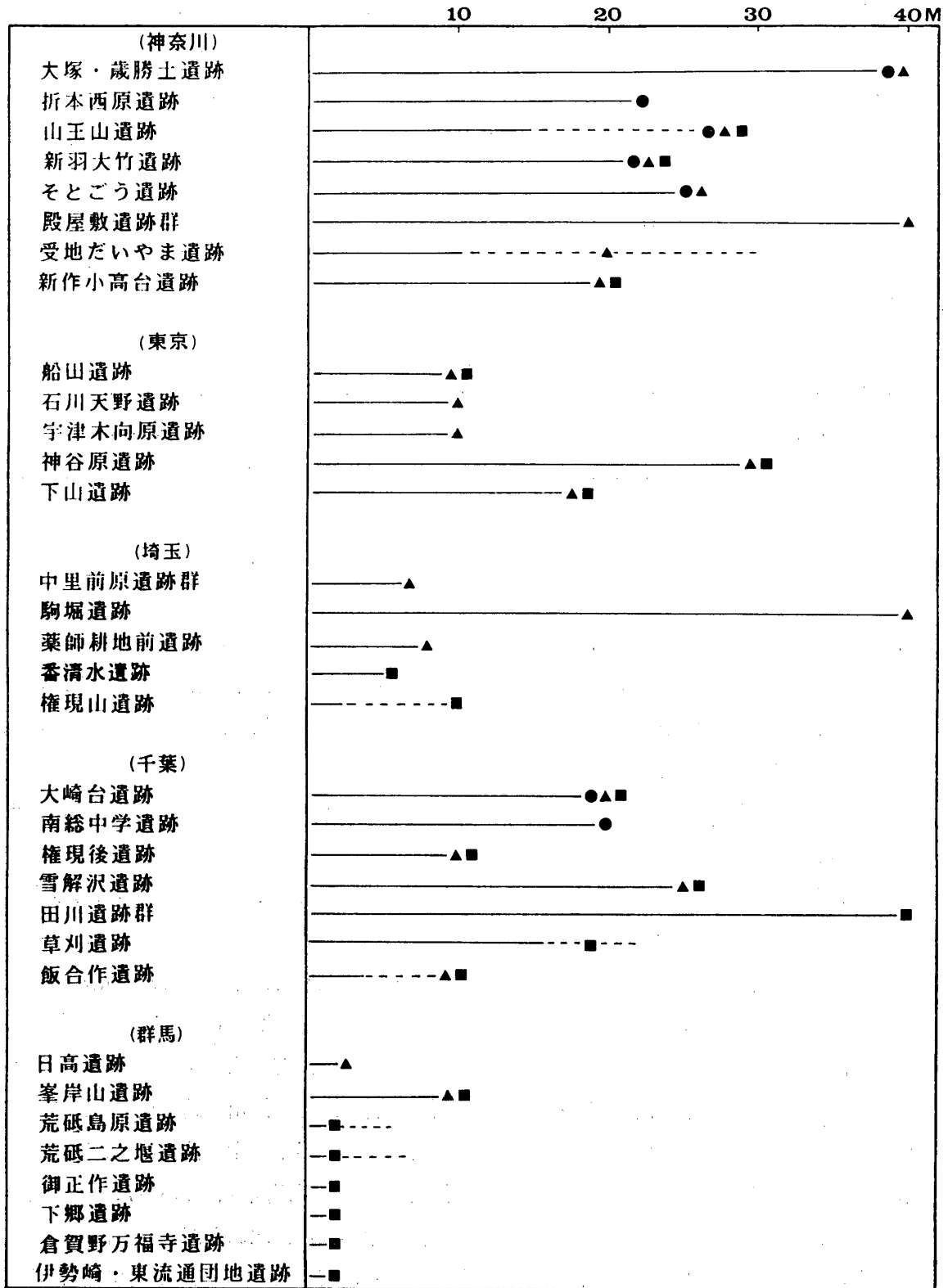


図5 各遺跡立地面と沖積地との比高差

集落の様相にみる古墳築造の条件

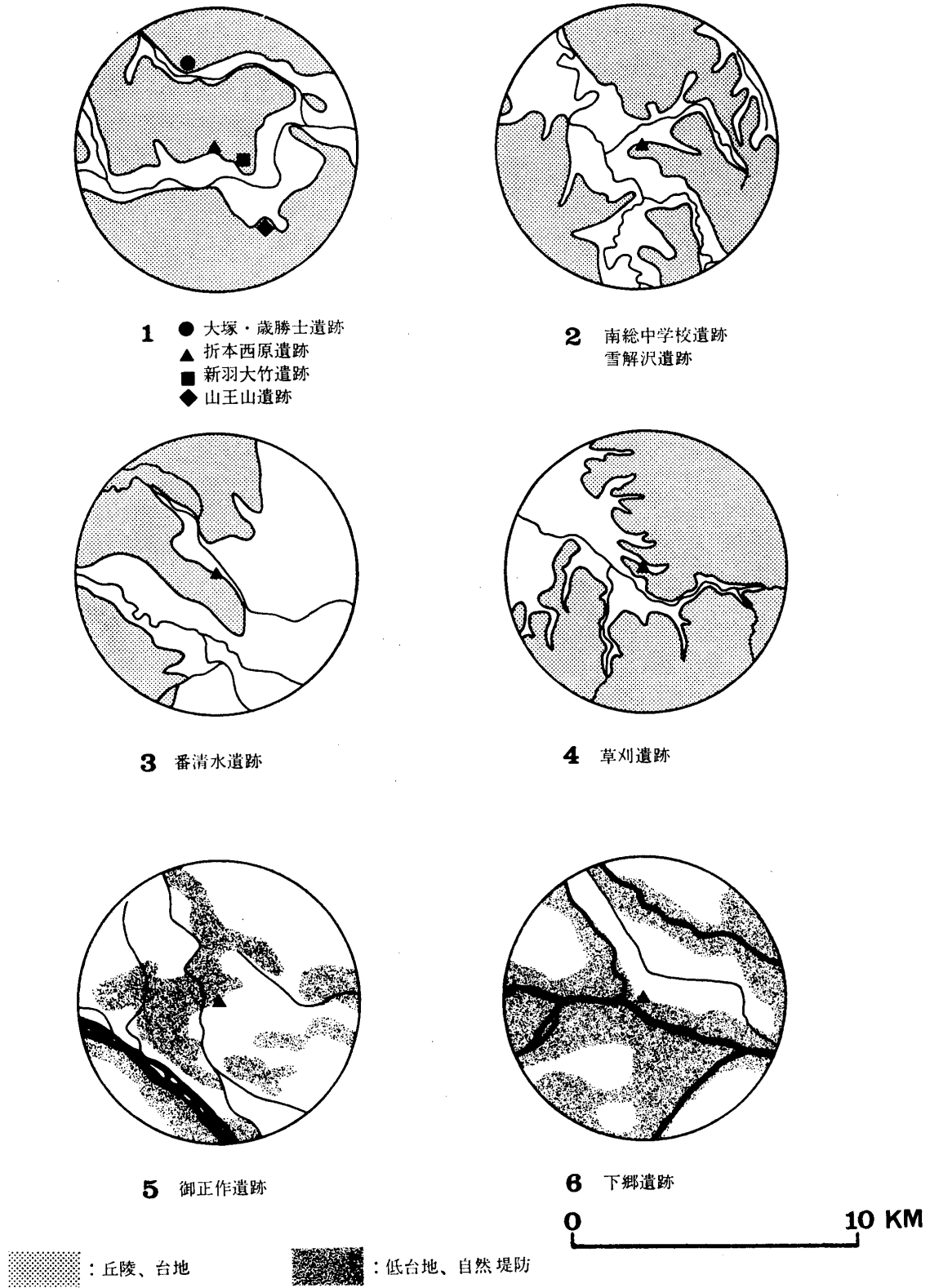


図6 (A)~(C)群に属する遺跡の周辺地形の例

い沖積地や小支谷を臨み、比高差も考慮すると地形的には独立している様相を呈する。

(B)群に属する番清水遺跡は舌状の松山台地北縁に立地し、北及び東側には荒川に注ぐ市野川が東流する沖積地が広がる(図6-3)。北と南に小支谷が入り込み、西方へは緩く傾斜しながら平坦面が続く。草刈遺跡は下総台地西南部、村田川の開析谷が東京湾に向かって大きく開く、右岸の比較的平坦な台地上に立地する(図6-4)。周辺には小支谷が多く見られ、北側にも幅約200から250mの支谷が1,000m以上にわたって入り込んでいる。この支谷の奥部をボーリング調査した結果、第4・6・10層に水田址が埋蔵されている可能性が指摘されている²⁰⁾。この2遺跡に見たように(B)群の遺跡の周辺に広がる沖積地は(A)群のように狭長ではなく、遺跡からみて一方向に大きく広がっている。

(C)群の御正作遺跡は利根川中流域左岸の東西に長い低洪積台地、邑楽台地上に立地する(図6-5)。周囲の沖積低地との明瞭な境界を形成している崖線の東側、広い水田地帯に舌状に突出する微高地上に遺構が展開している。下郷遺跡は前橋台地上に立地し、南側は急崖を経て東流する烏川に至る(図6-6)。遺跡内の標高は北側が72m、烏川近くで70mと平坦面が続く、東西の微高地上には桑畑・宅地が広がっている。また北側には利根川との間に、水田面がほとんど比高差をもたずに大きく広がる。このように(C)群の遺跡は、遺跡内においても、また周囲の沖積低地に対してもほとんど比高差がなく、周囲に平坦面が大きく広がるという共通性を持つ。

平面的にみた地形の在り方から捉えたこれら3群を、比高差との関係からみていくと次のことが指摘できる。まず(A)群に含まれる遺跡は総て(Ⅱ)～(Ⅳ)群のいずれかに属し、沖積地と10m以上の比高差をもつ。(A)群には全体の六割の遺跡が含まれ各時期の、あるいは各時期にわたって営まれた遺跡を多く含む。(B)群の遺跡は大河川が形成した広い沖積地や海岸平野を臨むため比高差にはバラエティーがみられるが、埼玉県内の遺跡は駒堀遺跡を除いて10m以内である。(C)群の遺跡は総て(Ⅰ)群に属し、日高遺跡以外は古墳時代前期に形成される。赤城山の南麓端部にあたる荒砥地区の遺跡は、遺跡内での比高差が認められ周辺における現在の土地利用状況をみると、水田と畑が混在している点で他の(C)群の遺跡とは異なる。比高差と周辺の地形に注目して抽出した各群にある程度の相関関係が認められるのは当然であるが、(Ⅰ)群のほとんどが(B)群・(C)群に含まれ弥生時代終末期から古墳時代前期にかけて営まれた遺跡であることは、該期を特徴づける現象として重要である。しかもこの現象は大河川の流域を中心にみられる。一方(A)群にも古墳時代前期に集落が営まれている遺跡があり、遺跡立地の多様さは立地条件を平面的に見ると更に明確になる。

以上まとめると(A)群の遺跡の大部分は両側を丘陵・台地に挟まれる沖積地に10m以上の比高差をもって臨み、近辺に小支谷が存在することが多い。(B)群にも(A)群と同様小支谷を伴う遺跡が含まれるが、大河川や海岸の方向に対して空間的に開放的である。(C)群の遺跡は荒砥地区の遺跡を除くと大河川の流域に位置し、視覚的には周囲に平坦面が続く。従って(B)群とも異なり、360度空間的に開放的である²¹⁾。弥生時代の遺構の展開面と重複、あるいは近接する形で古墳時代前期

集落の様相にみる古墳築造の条件

の遺構が検出される遺跡は存在するし、また古墳時代のみの遺構が検出される(A)群に属する遺跡もみられる。しかしながら集落立地のタイプと変遷を大きく以上のように把握すると、古墳時代前期に従来と異なる空間構造をもつ遺跡が出現する現象に注目しなければならない。

(四)

これまで集落内の様相と集落を取りまく地理的環境とにわけて弥生時代から古墳時代前期の遺跡の在り方を概観してきた。最後に、この時間の流れの中で前方後円墳を代表とする古墳の築造が開始されたことを念頭に置き、指摘してきた諸現象の中に見出せる接点の見通しを述べることで、この方法論的予察の締め括りとしてたい。

我々は古墳築造に参画した人々の痕跡を、考古学的には集落遺跡という総体的な形で知りうるのみである。性格の異なる考古資料間の空間的把握を取りまく様々な問題は、資料の蓄積によりすべて解消されるわけではない。しかし確実に増加していく遺跡の数と同性格・同種類の考古資料に対する研究の進展からは、性格の異なる資料間の相関関係に対する視点が開かれてくる。いま資料を大きく集落と古墳とに分けた場合、認識の上でこの両者を繋げる要素はそれぞれを取りまく地理的環境である。そこで先に取り上げた二要素、比高差と平面的に見た地形の在り方がそれぞれのどのような意味を持つかを考えてみる必要がある。人間が居住地を選定する際の必要条件は、居住目的や生活様式などにより様々であるし、また条件が複数ある場合は優先順位も存在したであろう。土地の選定を規制する外的要因がないかぎり、この必要条件は意識的・無意識的に遺跡の立地に何らかの形で反映されていると考えられる。

一般的に台地・丘陵上は乾燥しており風通しや日当たりが良いため害虫の被害は少なく居住し易く、河川の氾濫による水害も避けたえたであろう。また見晴らしの良さ、比較的急な斜面に囲まれる等の理由から防御的な意味を付与された場合もあったかもしれない。一方沖積地及び点在する微高地を何らかの形で生産基盤としていたり生活用水を求める場合、遺跡立地面との比高差が大きいと労働量の増加につながるし、生産物に対する管理力とも関わる。比高差は利用可能な平坦面の広さと関わるので、平面的に見る地形の在り方と不可分に結びつく。(A)群の遺跡は居住域と墓域が一体となって集落を形成し、面として連続的に展開していく上での限界が存在する状況を最も顕著に示す。これは全く孤立していることを必ずしも意味しているわけではないであろうし、居住地を異にし墓地を共有するという理念的な紐帯が存在したかもしれない。これに対し(B)群及び(C)群の一部の遺跡、特に後者に属する遺跡は沖積地に対する比高差の小ささと対応して、居住域や墓域を連続的に展開させる潜在力を有する環境に立地している。すなわち広い沖積低地の周囲の平坦面が続く低台地や微高地上では、集落は相対的に大規模になる可能性をもつ。

地理的環境は集落を形成する集団の生業活動とも密接に関わる。弥生時代以降の主たる生業活動として一般的に水稲耕作が考えられているが、近年における水田址及び関連諸施設の検出例の増加は目覚ましく、その在り方のバラエティーが指摘されるに至っている²²⁾。また立地や土壤に注目し

たり、自然科学的分析方法を用いた研究も多く行なわれている²³⁾。しかし現在検出されている例のほとんどは、かつて有機的な関係をもって機能した全体の一部にすぎず、地域毎の生業の在り方を具体的かつ詳細に論じるには至っていない。今ここで水稲耕作以外の生業、特に畑作をも念頭において各遺跡の生産基盤について具体的に言及することはできない。水稲耕作が集落の生成と不可分であると考えられる場合、基本的には近在の沖積地を中心として行なわれたことは確実で、耕作・灌漑技術上の限界を考慮すると当時の水田の面的広がりには現在の水田面よりも狭いと考えられる。つまり現水田面の広がりには、常に可耕地としての最大限界を示すにすぎないため、一定地域内における可耕地の広さを集落の規模や水稲耕作に対する依存度と直結させて解釈するのは問題が残る。重要なのは広さの総計ではなく、土壌の性質や旧地形などを考慮した遺跡周辺での在り方であり、より微視的な視点が必要とされる。従って本稿では沖積地の在り方を生業と関係づけて具体的に論じることはせず、生業基盤としての潜在力を有するものとして捉えておく。寧ろ生業基盤としてだけでなく、人の往来・物品の移出入・情報の流入出などの舞台としての役割を持つという面を評価する。これは沖積地が集落に果たす外的機能であり、生業基盤としての在り方は内的に機能していると捉えることができる。

外的機能の側面から沖積地の在り方を見た場合、先の(A)・(B)・(C)各群間の相違は個々の集落を取りまく社会的状況、換言すると集落間の関係と密接に関わると考えられる。すなわち(A)群の遺跡は集落としての完結性の強さを潜在的に有すると同時に、狭長な沖積地の在り方から外的機能の作動方向が常に一定で、変化する余地がほとんどない。(B)群の遺跡は大河川が形成する広大な沖積地や海岸平野を臨むことから、周辺の沖積地の占める割合が相対的に多くなる。この群に属する遺跡は(A)群の遺跡との位置関係において同一水系の場合下流に位置するわけで、外的機能の質・量が(A)群の場合とは本質的に異なると考えられる。(C)群においてこの可能性を最も強調することができる。この群の集落、特に大中河川流域の微高地上に立地する集落は、(A)・(B)両群の集落に比べて相対的に大規模になる潜在力を有し、開放的な空間構造は沖積地・微高地・河川を問わず様々な形での集落間関係の形成や情報の流入出を促したであろう。以上のような各群の空間構造の相違は、集落内での不均衡さの表象として捉えた墓域での較差拡大現象を念頭に置くと、集落間の較差をも生ぜしめる重要な要素として位置づけることができる。方形周溝墓群の中に異なる形態が出現するようになること、特に下郷遺跡のように前方後円墳が築造されている様相は、形態のみならず規模の大きさと相関関係にある墳丘の高さと相俟って、弥生時代と異なり墓域が一集落の認識を越える存在へと転化したことを示している。群馬県南部において(C)群のような地理的環境が広く展開していることは、当地における前期古墳の多さ及び後の展開と深く関わると考えられる²⁴⁾。一方飯合作遺跡のように(A)群に属して異なる形態を含む例もみられる。単に沖積地の広さと結びつけられないことの例証であり、様々な形での「動き」と関連させて解釈していく必要がある。

最後に集落立地の在り方を以上のように位置づけた場合、前期古墳に認められる様相と如何に関わるかということに対する見通しを述べることにする。前期古墳は基本的には首長個人の墓でその

集落の様相にみる古墳築造の条件

権力を誇示するという面を持つ一方、葬送行為を行なう集団の祭祀イデオロギーを何らかの形で凝縮している²⁵⁾。例えば副葬品の質・量や配置、埋葬施設の構造や築造過程などにその一側面をみることは可能である。これらは一度葬送行為が完了すれば目に触れることはないので観念的な要素と言える。一方築造や葬送行為と関係し、築造後も目に触れる視覚的な要素がある。山頂・丘陵上での立地や高い墳丘は存在そのものを示すし、墳丘上に各種埴輪を並べたり葺石を行なうことは、築造や祭祀行為の一過程であると同時に視覚的効果を高めたことも事実である。また墳丘の整形において側面観を特に意識した例もみられる²⁶⁾。従って被葬者個人の問題にとどまらず、視覚的効果の対象になったであろう地域、あるいは集団に関する問題提起がなされることにより、結果としての築造という側面だけではなく、目的をもつ築造という側面がより鮮明になってくる。ところで古墳は墳丘の存在や立地から資料としての確認のされ方が集落と異なり、考古学的に周囲の状況が不明である場合が多い²⁷⁾。従って多くの場合存在自体が明確で、おおよその時間的位置付けが可能な点的資料として用いることになる。すなわち古墳をして集団を代表するものとして捉え、その属性や築造の連続性、密集の度合いなど個々の古墳ないし群としての在り方に注目して当時の社会状況の一側面を論じうるのである。

このような分析方向を踏まえつつ、先に指摘した古墳の視覚的側面を念頭におくと、周辺における該期集落の存在確認の如何に関わらず、地理的環境に対する注意が必要である。この場合の地理的環境とは、本稿において試みた集落の場合と同様に、周辺の一定地域内における居住や主たる生産活動の場としての適地・不適地の在り方²⁸⁾であり、それは更に様々な形での「動き」の方向を規定する。従って集落に一定の傾向が見出せたように、古墳の築造され方の多様性及び多様でありながら密集する様相が認められることに対して、直接対象資料としての古墳以外からも探ることができ、「畿内中枢としての大和連合を盟主とする一種の政治的かつ経済的交流」²⁹⁾の表われ方を体系づける道を開く。

以上集落・古墳の地理的環境に対する認識の重要性を述べてきた。古墳に関しては具体的に資料を扱わず見通しを指摘するに留まったが、このようにして作られる遺跡を取りまく枠組を認識した後に、個々の資料の属性に立ち戻ることによって新たな視点が開けてくると考える。資料の増加に伴いますます詳細に論じることが可能になっている集落・古墳の研究成果を、意識的に連動させることの必要性を強調したいがために粗い論理展開になってしまったが、今後具体的な検討の蓄積を課題としたい。

小稿は一九八五年度東京大学文学部に提出した修士論文の一部を加筆・修正したものである。上野佳也・藤本強両先生をはじめとする東京大学考古学研究室、東京大学遺跡調査室の諸先生、諸先輩、また熊本大学の甲元眞之先生には貴重な御教示を賜りました。岡山大学の近藤義郎先生には講義・発掘調査を通じて、また新潟大学の甘粕健先生には発掘調査を通じて色々ご指導いただきました。日本考古学研究所の柿沼修平氏には大崎台遺跡の概要を知るのに御世話になりました。末筆

ながら記して感謝する次第です。

註

- 1) 藤本強1985『考古学を考える』雄山閣80～83P
- 2) 考古資料としての住居址・方形周溝墓や土壇の各々の分布範囲を便宜的に居住域・墓域として捉えることにする。
- 3) 本稿で取り上げたのはこのような遺跡で、利根川以西及び群馬県で確認された次の33遺跡である。
 (神奈川県) 大塚遺跡(伊藤郭・武井則道 1976「大塚遺跡発掘調査概報」『調査研究集録』第一冊 港北ニュータウン埋蔵文化財調査団), 歳勝土遺跡(坂上克弘他 1975『歳勝土遺跡 港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告V』横浜市埋蔵文化財調査委員会), 折本西原遺跡(石井寛他 1980『折本西原遺跡』横浜市埋蔵文化財調査委員会), 新羽大竹遺跡(上田薫他 1980『神奈川県埋蔵文化財調査報告17 新羽大竹遺跡』神奈川県教育委員会), 山王山遺跡(河野喜映・宍戸信悟 1985『山王山遺跡』神奈川県立埋蔵文化財センター), そとごう遺跡(鈴木敏弘編 1971『そとごう遺跡調査概報』考古学資料刊行会), 殿屋敷遺跡群(戸田哲也他 1985『横浜市港南区 殿屋敷遺跡群C地区発掘調査報告書』玉川文化財研究所), 受地だいやま遺跡(重久淳一他 1986『奈良地区遺跡群I 発掘調査報告 No.11地点 受地だいやま遺跡上巻』奈良地区遺跡調査団), 新作小高台遺跡(増子章二他 1982『新作小高台遺跡発掘調査報告書』川崎市教育委員会)(東京都) 船田遺跡(服部敬史編 1970『船田 東京都八王子市船田遺跡における集落址の調査 I』八王子市船田遺跡調査会), 宇津木向原遺跡(大場磐雄他 1973『宇津木遺跡とその周辺』中央高速八王子地区遺跡調査団・八王子市教育委員会), 石川天野遺跡(倉田芳郎編 1982『東京・石川天野遺跡4次調査』先史22 駒沢大学考古学研究室), 神谷原遺跡(吉廻純他編 1981『神谷原I』), 大村直他編 1982『神谷原III』八王子市栢田遺跡調査会), 下山遺跡(玉口時雄他 1982『下山遺跡I』世田谷区遺跡調査会)
 (埼玉県) 中里前原遺跡群(秦野昌明・柴崎弥生 1983「中里前原遺跡群にみる弥生時代後期集落」埼玉考古第21号), 駒堀遺跡(栗原文蔵他 1974『関越自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告一Ⅱ一駒堀』埼玉県教育委員会), 薬師耕地前遺跡(野村侃司・赤石光資 1978『上尾市文化財調査報告 第4集 薬師耕地前遺跡』上尾市教育委員会), 番清水遺跡(金井塚良一編 1968『番清水遺跡一発掘調査の概報一』考古学資料刊行会), 権現山遺跡(笹森健一編 1983, 84『郷土史料第29集 埋蔵文化財の調査(V)』『郷土史料第30集 同(VI)』上福岡市教育委員会)
 (千葉県) 大崎台遺跡(柿沼修平他 1984『大崎台遺跡発掘調査概報』, 1985『大崎台遺跡発掘調査報告I』, 1986『同II』)佐倉市大崎台B地区遺跡調査会), 南総中学遺跡(倉田芳郎編 1978『千葉・南総中学遺跡』先史10 駒沢大学考古学研究室), 雪解沢遺跡(金丸誠他 1984『市原市 雪解沢遺跡』千葉県立市原園芸高等学校・千葉県文化財センター), 権現後遺跡(阪田正一他 1984『八千代市権現後遺跡』, 1986『八千代市ヲサル山遺跡』千葉県文化財センター), 田川遺跡群(千田利明他 1980『田川遺跡群』田川遺跡群発掘調査会), 草刈遺跡(高橋康男編 1985『草刈遺跡』市原市街路課・市原市文化財センター, 三森俊彦他 1983『千原台ニュータウンII』), 高田博他 1986『同III』千葉県文化財センター), 飯合作遺跡(沼沢豊他 1978『佐倉市飯合作遺跡』佐倉市振興協会・千葉県文化財センター)
 (群馬県) 日高遺跡(横倉興一他『日高遺跡(IV)』高崎市教育委員会), 峯岸山遺跡(蘭田芳雄他 1975『峯岸山山遺跡発掘調査報告(第一次)』, 『同(第二次)』), 荒砥島原遺跡(石坂茂他 1983『荒砥島原遺跡』群馬県埋蔵文化財調査事業団), 荒砥二之堰遺跡(徳江秀夫他 1985『荒砥二之堰遺跡』群馬県埋蔵文化財調査事業団), 御正作遺跡(車崎正彦他 1984『御正作遺跡』大泉町教育委員会), 下郷遺跡(巾隆之他 1980『下郷』群馬県教育委員会), 倉賀野万福寺遺跡(平岡和夫他 1983『倉賀野万福寺遺跡』山武考古学研究所), 伊勢崎・東流通団地遺跡(坂ロー・赤山容造編『伊勢崎・東流通団地遺跡』群馬県企業局)
- 4) 本遺跡群は中里前原遺跡・中里前原北遺跡・上太寺遺跡という複数の遺跡の集合であり、註3)秦野・柴崎1983に従い中里前原遺跡群として把握する。

集落の様相にみる古墳築造の条件

- 5) 大形の13号方形周溝墓は住居址群と重複関係にある。
- 6) 方形周溝墓が住居址を壊して築造されている状況からもっとも容易に認識できる。受地だいやま遺跡・雪解沢遺跡・権現後遺跡では両者の切り合い関係は認められないが、近接する状況からは遺構を取りまく空間の機能が時間を異にして働いたとみななければならない。権現後遺跡は西側のヲサル山遺跡と併せて弥生時代後期から古墳時代前期にかけて形成された一連の集落遺跡として把握でき、弥生時代後期の居住域の中に古墳時代前期の方形周溝墓が築造されている様相を認めることができる。(藤岡孝司 1986「印旛沼南部地域における後期弥生集落の一形態—八千代市権現後・ヲサル山遺跡の分析—」千葉県文化財センター研究紀要10)
- 7) 本遺跡においては方形周溝墓が住居址を切るだけでなく、逆の関係も認められる。広い台地上における土地利用の変遷の過程で、墓域が居住域に転換することもあったのであろう。
- 8) 下郷遺跡・倉賀野万福寺遺跡の報告者は、床面が軟弱であること、炉址が検出されないなどの理由により、墓域内で検出される住居址に対して一時的な在り方を想定して殯屋の性格を付与している(註3)巾ほか1980, 平岡ほか1983)。倉賀野万福寺遺跡では6号住居址が6号方形周溝墓を、7号住居址が4号・5号方形周溝墓を切って構築され、住居址と方形周溝墓の主軸方向は基本的に一致している。このような状況は、居住域・墓域という同性格の遺構を群として一括した空間の転換という認識だけでなく、個々の住居址の持つ機能に対して注意する必要性を示唆している。一方床面がよく踏み固められていたり(13号住居址)、炉の火床面がよく焼け貯蔵穴を持つ住居址(8号住居址)が方形周溝墓に切られており、居住域が墓域に転換した様相をうかがうこともできる。
- 9) 例えば大塚・歳勝土遺跡, 中里前原遺跡群, 飯合作遺跡, 荒砥島原遺跡
- 10) 例えば山王山遺跡, 石川天野遺跡, 神谷原遺跡, 田川遺跡群第1・2地点
- 11) 図中の柱状は、註3)の各報告に基づいて方形周溝墓の規模を同縮尺でドットした際の、最大の周溝墓と最小の周溝墓の間の長さを表わしている。従って規模とは関係なく、相対的な規模較差を示している。右端の数字は対象とした周溝墓の数を表わし、●印は異なる形態を含む遺跡に付した。石川天野遺跡・田川遺跡群は対象数が2基と少ないが、立地からみて墓域としての様相を代表していると考えられるので取り上げた。また飯合作遺跡では、東側の一群(D15からD23)をA群、前方後方形の1・2号墳を取りまく一群(3・4号墳, D01からD14)をB群としている。
- 12) 発掘調査はされていないが、註3) 笹森1983, 84では等高線から推測している。
- 13) 祭祀行為と関連づけられることが多い。例えば伊藤敏行1986「東京湾西岸流域における方形周溝墓の研究Ⅰ」東京都埋蔵文化財センター研究紀要Ⅳ・駒見佳容子1985「葬送祭祀の一検討—関東地方を中心として—」土曜考古第10号
墳丘上だけでなく、周溝内での埋葬に伴うことを示す資料もある。例えば草刈遺跡B区140号址・192号址(高田博他1986『千原台ニュータウンⅢ』千葉県文化財センター)
- 14) 註3)平岡ほか1983に基づいて作成。全体の規模・形態が明確でない10号・12号方形周溝墓は除く。
- 15) 註3)巾ほか1980に基づいて作成。出土土器を全部あげてはいないが、理解の上に影響はない。図3において●印を付した二重口縁壺形土器は、焼成前に底部穿孔されている。
- 16) S Z 46は地籍図から前方後円墳であることがうかがえる。(註3)巾ほか1980)
- 17) 図中における●・▲・■印は各々、弥生時代中期後半・後期・古墳時代前期に属する遺構が検出されていることを示す。横の波線は遺跡内の比高差を表わす。権現山遺跡の周辺では遺跡名は異なるが微高地上からも住居址が検出されている(註3)笹森1983, 84ほか, 笹森健一他1979, 1981『埋蔵文化財の調査(Ⅰ)』『同(Ⅲ)』上福岡市教育委員会)ので、居住域と沖積地との比高差がほとんどない(Ⅰ)群の段階があったと考えてよい。
- 18) 本遺跡は低平な大宮台地浦和支丘上に立地し、南北に細長い鴻沼低地を西に臨む。従って付近の沖積地の在り方はA群の遺跡に類似するが、比高差は小さく更に西方約5kmには荒川が南流していることから

本群に含める。

- 19) 国土地理院発行の二十万分之一地勢図をもとに作成し、遺跡を中心に半径 5 km 内の地形の概略を表わしている。上が北方位である。
- 20) 関口達彦 1985「プラント・オパール分析法による古代水田址の探査について」千葉県文化財センター研究紀要 9
- 21) 開放的というのは自由に往来できることを必ずしも意味しない。視覚的・感覚的に開けた空間構造をもつという意味である。
- 22) 例えば都出比呂志 1983「古代水田の二つの型」樋口隆康教授退官記念論集『展望アジアの考古学』、大塚初重 1985「登呂の考古学」『登呂遺跡と弥生文化』小学館、菅原康夫 1980「弥生系農業における水利施設の意義と展開上・下」古代学研究第92・93号、広瀬和雄 1983「古代の開発」考古学研究第30巻第2号
- 23) 例えば井関弘太郎 1983「弥生時代～古代における稲作の地形環境」地理第 28 巻第 10 号、八賀晋 1971「古代の農耕と土壌」『古代の日本』第 2 巻・1983「発掘調査からみた古代水田の土壌環境」地理第 28 巻第10号
- 24) 当地域において伊勢湾地方独自の S 字状口縁台付甕が集中的に分布していることから、大規模な移住が行なわれた可能性が指摘されてきた。例えば橋本博文1979「上野東部における首長墓の変遷」考古学研究第26巻第2号、田口一郎 1981「Ⅺ 将軍塚古墳の築造年代と被葬者の性格」『元島名将軍塚古墳』高崎市教育委員会、梅沢重昭 1985「毛野政権の背景」『文明のクロスロード Museum Kyushu』第16号
大規模な移住により短期間での人口集中現象が起こったことは十分考えられるが、定着していく過程で周囲の地理的環境と密接に関わるようになったと考えられる。
- 25) 近藤義郎 1985『日本考古学研究序説』282～283 P
- 26) 例えば西殿塚古墳（榎本誠一 1983「大型古墳の立地について一奈良県下における前・中期古墳一」『関西大学考古学研究室開設三十周年記念 考古学論叢』を参照）、森将軍塚古墳（長野県更埴市教育委員会 1982『森将軍塚古墳 一保存整備事業第 2 年次発掘調査概報一』を参照）
- 27) 前方後円墳の周囲の様相を知りうる遺跡は下郷遺跡の他に、川部・高森古墳群（真野和夫 1985「赤塚古墳とその周辺」えとのす第29号）、行人塚古墳（松本一男他 1985『女高遺跡発掘調査概報』掛川市教育委員会）などがある。ただし行人塚古墳は出土遺物がないため、所属時期は明確ではない。
- 28) この点に注目する研究として、例えば石川隆司 1986「東北地方における出現期古墳の様相」法政考古学第11集がある。
- 29) 近藤義郎 1983『前方後円墳の時代』199 P

参 考 文 献

- 井関弘太郎 1985「弥生時代以降の環境」『岩波講座日本考古学 2』
井上義弘 1979「南関東弥生時代の集落立地」季刊どるめん第23号
上野純司 1977「南関東における古式土師式土器編年試論」史館第 9 号
大塚初重・井上裕弘 1969「方形周溝墓の研究」駿台史学第24号
大村 直 1983 a 「弥生土器・土師器編年の細別とその有効性」史館第14号
_____ 1983 b 「弥生時代におけるムラとその基本的経営」史館第15号
加藤修司 1978「小型器台・小型丸底埴の出現をめぐる諸問題」物質文化第29号
金井塚良一 1972「関東地方の方形周溝墓」考古学研究第18巻第 4 号
熊野正也 1979「南関東における弥生文化の特徴」季刊どるめん第23号
栗原文蔵他 1969 「埼玉の方形周溝墓」埼玉考古第 7 号
甲元眞之 1986「農耕集落」『岩波講座日本考古学 4』
塩谷 修 1985「茨城県地方における方形周溝墓の出現とその性格」史学研究集録第10号 国学院大学日本

集落の様相にみる古墳築造の条件

史学専攻大学院会

- 鈴木敏弘他 1977『原史墓制研究5』原史墓制研究会
高倉洋彰 1973「墳墓からみた弥生時代社会の発展過程」考古学研究第20巻第2号
_____ 1975「弥生時代の集団組成」『九州考古学の諸問題』
高橋誠一 1975「弥生時代の集落立地—大阪府域の高地と低地の間で」人文地理第27巻第2号
滝沢 亮 1981「南関東における古式土師器の様相」物質文化第36号
田中新史 1977「市原市神門四号墳の出現とその系譜」古代第63号
_____ 1984「出現期古墳の理解と展望」古代第77号
田中義昭 1976「南関東における農耕社会の成立をめぐる若干の問題」考古学研究第22巻第3号
_____ 1984「弥生時代集落研究の課題」考古学研究第31巻第3号
田村言行 1979「弥生時代後期における南関東の動向」季刊どるめん第23号
築比地正治 1983「房総における方形周溝墓について」MUSEUMちば第14号
都出比呂志 1970「農業共同体と首長権」『講座日本史1』東京大学出版会
_____ 1979「前方後円墳出現期の社会」考古学研究第26巻第3号
_____ 1983「環濠集落の成立と解体」考古学研究第29巻第4号
_____ 1984「農耕社会の形成」『講座日本歴史1』東京大学出版会
西川修一 1983「南関東における弥生～古墳時代土器研究史」古代第75・76合併号
比田井克仁 1983「古墳時代前期高坏考」古代第74号
_____ 1985「外来土器の展開」古代第78・79合併号
水野正好 1972「古墳発生の論理(1)」考古学研究第18巻第4号
茂木雅博編 1972『考古学調査報告 常陸須和間遺跡』雄山閣
山岸良二 1981『考古学ライブラリー8 方形周溝墓』ニュー・サイエンス社
湯川悦夫・加納俊介 1972「南関東出土の東海系土器とその問題」小田原考古学研究会会報第5号
横川好富 1982「埼玉県の古式土師器」埼玉県史研究第10号